「よいしょ……っと」
静寂に包まれたこの大図書館で、赤い髪の少女が床に散らばった本を拾い上げていた。
その少女の名前は『こあ』という。
こあは、大図書館で司書兼雑用係をしている小悪魔という種族の少女であった。
こあ、という名前は、彼女を召喚した主から付けられた名前であり、名付けた理由も「小悪魔のこあってどうかしら」
とても安直な名前を付けられてしまったが、付けられた本人は、決して悪い気はしていなかった。
こあは拾い上げた本を何冊か抱えて周りを見渡してみると、あちこちに大量の本が散らばっていた。
別に読み散らかしている訳ではなく、本棚から落下してしまったものである。
それこそ、まるで巨大な地震でも発生した後のような惨状であった。
しかし、散らばった本はこれだけではない。
そこかしこで同じような惨状が広がっていた。さすがに、この状況には溜息しか出てこなかった。
こあが天を仰ぐと、そこには本来、普通の建物と同じような天井があるはずだったのだが、現在はその天井が存在せず、まるで何かに刳り貫かれたような大穴が空いていた。
その大穴からは日の光が差し込み、普段よりも図書館は明るくて風通しも良い。少々カビ臭い図書館にとっては、滅多にない空気の入れ替えである。
また、大穴が空いてるのは天井だけではなく、その真下の床にも、同様な穴が空いていた。
どうしてこんな状況になっているのかと言うと、こあが本を拾い始める数時間前、図書館は不幸な事に、二回も襲撃に遭ってしまったのであった。

――一度目は今から五時間程前に遡る。
この図書館は、紅魔館という館の地下に存在するのだが、紅魔館の主である『レミリア・スカーレッ

ト』が、この幻想郷の全てを覆い尽くすように紅い霧を発生させたのが、事の始まりであった。
本人曰く「何で霧を発生させたかって？　そんなもの決まってるじゃない。日光を遮断する為よ。それと面白いものが釣れそうだし」そんな身勝手な理由で幻想郷は異変に包まれたのだった。
その結果、その異変に気付いた人間が二人、紅魔館にやってきたのだ。
一人は青い巫女。ここ最近新しくやってきた博麗の巫女である。
もう一人は森に住んでいる黒い魔法使いであった。
こあが直接対峙したのは青い巫女の方だった。しかし、青い巫女は滅法強く、スペルカードというルールにも慣れてなかったこあは、あっけなく敗北してしまったのだった。
しかし、この時点で周りの本棚には大した被害は出てなかった。問題はこあと対峙した青い巫女ではなく、黒い魔法使いの方であった。

魔法使いは、この図書館の管理人である『パチュリー・ノーレッジ』と対峙する事になる訳だが、いくらだだっ広いとはいえ、屋内で魔法合戦を始めてしまえば、大惨事になる事は避けられなかった。
ここにある書物のほとんどが、特殊な防御魔法に守られているので、燃えたり破れたりするような事はないが、様々な衝撃が加わり、あちこちの本棚から落下してしまった。
激戦の末、魔法使いが勝利して去って行くのだが、これでも被害はさほど大きくはなかった。
しかし、追い討ちをかけるように二度目の悲劇がこの図書館を襲う事になる。
巫女達の襲来から一時間程経った頃であった。
パチュリーが血相を変えてこあを呼ぶと、メイド長である『十六夜咲夜』を探すようにと言われ、急いで咲夜を探しに行く事になる。
だが、その間に図書館の地下と天井には大穴が空き、その衝撃で本はあちこちに散らばり、今の状態

に陥ってしまった。
大穴を空けた犯人は『フランドール・スカーレット』レミリアの妹である。
フランドールはありとあらゆる物を破壊する程度の能力を持ち、建物を破壊する事も容易であった。とある理由で、図書館の地下に幽閉されていたのだが、巫女達の襲撃により館が騒がしかった事に気付いたフランドールは、何が起こっているのか興味本位でレミリアの元へ向かって行った。
不運な事に、フランドールは猪突猛進が如く、地下の部屋から天井を突き破り、図書館を通り抜けて行ってしまったのであった。
その後、フランドールが大暴れをして、紅魔館の全員を巻き込んで大変な事になってしまうのだが、巫女達の活躍によって最悪な事態には至らず、何とか収束する事が出来た。
ホッと胸を撫で下ろしたこあは、パチュリーと共に図書館へ戻ってくると、そこには無慈悲な現実が待っていたのであった。

パチュリーは天井と地下の修復の為に、土人形を大量に召還するものの、魔力が尽きてしまったが、まだまだ土人形の数は足りず、魔力を補給しようと調合してあったマジックポーションを飲もうとしたが、どこにか消えてしまったという。
パチュリーはこあに問い掛けてみるが、こあにも心当たりが無かったので首を横に振った。
「……どこにやったのかしら」
そう呟いてどこかへ行ってしまった。
きっと、マジックポーションを探しに行ったか、新しく調合しに行ったのだろう。
結局のところ、本を片付ける作業はこあ一人でやる事になってしまった。
他に咲夜や、妖精メイドが沢山居るのだが、ほとんどの者が館の後片付けで、とても手を借りれるような状況ではなかった。

こあは淡々と本を拾い上げては、本棚に仕舞って行く。手の届く所にあればいいが、そうでない所は飛んで行って本棚へ戻す。
本の題名を見るだけで、どの本棚へ入れればいいか大体は検討がつくので、ある程度は円滑に片付いていく。
そんな事を何度も繰り返していると、散乱としている本の一つに、靴のつま先を引っ掛けてしまった。
「きゃっ!?」
床に手を突いて受身を取ろうとするが、両手は本を抱えているので手をつくことが出来ず、咄嗟に背中の黒い羽を展開して、倒れる前に体勢を直そうと思ったが、当然間に合うはずもなく、顔から本の山へと突っ込んでしまった。
「むぎゅ!!」
抱えていた本も含め、大量の本がこあの下敷きになった。その衝撃で大量の埃が舞い上がる。
「げほっげほっ……」
こあは咳き込みながら、ゆっくりと起き上がると、躓いてしまった紅い表紙の本を拾い上げる。
「あ、これは……」
こあは拾った本を開いて、中のページをペラペラと捲っていく。
「どこかにやったのかと思ったら、こんなところにあったんだ」
本を一度閉じて、表紙を見ると『スカーレット・クロニクル』と書いてあった。
その名の通り、これはスカーレット家の年代記であり、本の著者はこあ本人であった。
この年代記は、これの他にも数冊存在したのだが、いつの間にかどこかへ消えてしまい、こあはちょくちょく探していたものの、一向に見つからず、半ば諦めていたのだが、勿怪の幸いとはこの事を言うのだろう。
「それにしても、漸く見つかったのが、よりにもよって……」

この本には、幻想郷にやってくる前、まだレミリアとフランの両親が生きていた頃の事が記されていた。

しかし、その半分以上は文字が擦れていたり、ページが破れてたり、状態は決して良いとは言えない代物であった。

読めるページを探っていくと、残り三分の一程度はまともに読めるようだった。

こあは本の片付けも忘れ、引き込まれるように本のページを捲っていったのであった。